

はじめに

今、日本の女性の頭上を暗雲が覆っている。「絶望」という名の暗雲が。

女性が参政権を得たのが1945年。その翌年、戦後初の衆院選で女性当選者の割合は8・4%だった。そこから78年たつてようやく衆院選の女性当選者の割合は15%を超えた。

なんたる遅さ。暗澹あんたんたる気持ちになる。議会とは法律を作り、制度を作るところ。そこ

でこのあり様だと、男女平等だなんてとても実現しない。無理だ。不可能。ありえない。

でも、実は雲の隅っこに、小さな小さな切れ目がある。そこから光が見えている。

まだ、多くの人は気づいていないけれど。

2023年の統一地方選。9つの市区町村議会で、女性が半数、あるいは半数を超えた。

日本の地方議会は1788。そのうちの9つなんて……とまた暗い気分になりそうだが、

ちよっと待たれよ。その前は、4つしかなかったのだから（しかも、この9つの議会とは違

う＝朝日新聞調べ）。

つまり、統一地方選の分は、女性が半数以上の議会はゼロから9。このまま9倍、9倍と増えていけば8年後には729、40%を超える。これでも遅いが、国政は78年たって15%をようやく超えた、と思えばそのスピードははるかに速いし、加速するかもしれない。このトレンドを見ると、加速すると見ていいだろう。

女性の首長も64人（「女性首長によるびじょんネットワーク」のサイトより、2024年9月現在）。少なすぎる。でも、そもそも女性初の市長が誕生したのが1991年、ほんの30年前の話だ。1990年代になるまで、日本に女性市長は存在しなかったのだ。それから30年余、2023年の統一地方選では7人の女性市長が誕生している。

変化は起きているのだ。確実に。そして、加速して。

しかも、一度女性という異分子が入り込むと、さまざまな化学変化を引き起こす。

たとえば第2章で詳述するが、同じく2023年の統一地方選で東京都世田谷区議会に初当選した女性がいる。30歳だった。SNSを駆使して、それでつながった同年代の女性たちが応援した。定数50人のところ、75人が立候補して10位で見事当選。

で、それでめでたしめでたしとは終わらない。というか、本番はここからだ。

彼女の議会での初質問を、応援した女性たちが見に行った。

そして驚いた。なぜなら、彼女が質問していた時に、ベテランの男性議員たちがヤジこそ飛ばさなかったが、大きな声で、おしゃべりしていたからだ。あまりに失礼だし、初めて質問する彼女にとっては威嚇されたも同然だ。

これっておかしい。嫌がらせだ。ハラスメントだ。

立ち上がった女性たちがいた。議会でのハラスメントを規制するための条例を作るべく街頭とオンラインで署名を集め、陳情として世田谷区議会に提出した。当選させただけでは足らず、その後も動き続けなければならないのだ。

しかし、異分子が入り込んだことで、今まで当たり前のように見過ごされてきたこと、手つかずだったことが可視化され、疑問符がつく。そして改革が始まるのだ。こういう、今まで当たり前だったことがそうではなくなる、というところが多様性の意義なのだ。前提を疑うことから多様性は始まる。

そして、男性。「あー、男女平等、はいはい、正しいです、どうぞどうぞ女性のみなさんがご自由にやってください」と言ってそっぽを向かないでほしい。

声を大きくして言いたい。

これは、女性だけの問題ではありません。男性の問題でもあるのです、と。

男女がもっと平等になって、女性が生きやすい社会というのは、男性も生きやすい社会なのだ。ゼロサムではない。たとえば、働き方ひとつをとってそうだろう。女性が出産する。育休を取り、復帰をしても育児のために早く帰る。その時に、誰かにしわよせがいく、のではなくて、そういう働き方がおかしい、と業務の効率化や見直しにつながれば、男性にとっても働きやすい職場になるだろう。

それに、男女平等が実現していない社会で、男性性を強制されて、違和感を抱いたことはないだろうか。デートでは男性がおごるもの？ 男は泣いたらいけない？ 男の子は赤いランドセルを選ばない？ 男とはこうあるべきと思わされていないだろうか？

そんなの誰が決めたのだ。小さい頃からすり込まれ、そう思い込まれているだけではいいのか。男女平等になるというのは、女性が男性と等しく権利や発言権を得ること。そしてその先にあるのは、「女性が」生きやすい社会になるのではなくて、「誰もが」生きやすい社会になることなのだ。

これが、男性、とりわけエリート層にはなかなかわかってもらえない。ずっと多数派だったから、少数派の悲哀を味わったことがないのだ。そして、少数派の意見を聞くことが、少数派の過度の優遇となり、自分の権利が制限されると思ってしまう。

ちょっと想像してみしてほしい。人が100人いて、97人女性で、男性が3人しかない（LGBTQの存在を無視しているわけではなく、話を単純化するために、ひとまず男女に限らせてもらう）。少数派にとつて、こういう多数派の「圧」はすごい。何もなくても、その空気感にもう圧倒されてしまって、何も言えなくなる。男性がたばこ部屋やゴルフ場やバーやクラブで物事を決めてきたように、この97人の女性たちはランチ会やお茶会で重要な物事を決めてしまう。男性のことは誘わない。全く悪気はない。ただ視界に入っていないか、「来たいなら来れば」と思っているだけ。

でも、誘われない時に、この人数差で「自分も行きたい」と言うことは、ものすごく勇気がある、というのわかるだろう。そして、自分が誘われなかったランチ会やお茶会でどんどん重要なことが決まり、それが当たり前のようにどんどん進んでいったらどう思うだろう？ 自分は排除されたと疎外感を覚え、「どうせ自分なんて」と思って、やる気も

失ってしまおうだろう。

これが、女性たちがこれまで置かれてきた状況なのだ。本文中でも具体例を引いてさらに解説したい。女性政治家がもっと、たとえば倍に増えたら、男性も確実に生きやすくなる。それは彼女たちがこれまでに実現してきた政策を見ればわかる。

男性と女性だけの話ではない。障害があったり、ひとり親だったり、ヤングケアラーだったり……、多くの人は何らかの「マイノリティ性」「生きづらさ」を抱えているのではないだろうか。一見何の不满もなさそうな、恵まれていそうな人だって、実は……ということはよくある話である。その時に、マイノリティ性を実感している人たち、当事者たちが政治の世界にいれば、それだけ政策の幅は広がる。強者に見える男性だって、自分のマイノリティ性にふたをして見ないふりをしているだけかもしれない。

本書では、地方政治で今何が起きているのか、あきらめなかった女性たちはどんなふう

に政治を変えつつあるのか、なぜそれが起きたのかについて、各地の例で見ていく。

また、海外ではどのように「雲に切れ目」を入れてきたのか（つまり、制度として政治の世界に女性をどう増やしてきたのか）、その結果何が起きたのかも見ていく。

そして今後はどうなるのか。実は、日本の地方だけでなく、中央レベルでも変化が起きている。その理由を考察し、展望もしてみたい。

絶望するのはまだ早い。ようやく雲に切れ目が入ってきたのだから。その先にあるのは、未来と、たぶん希望だ。

なお、本書に収録した文章は、筆者が2019年から朝日新聞及び同GLOBE、with Planetに書いた記事を修正・加筆したものや、独自に取材・執筆したものである。登場人物の談話は、断り書きがない限り、原則として筆者自身が取材している。また所属や肩書き、年齢などは取材当時あるいは言及している出来事があった当時のものである。